



岐阜の博物館

編集兼発行

〒501-3941 関市小屋名
(岐阜県百年公園内)
岐阜県博物館内
岐阜県博物館協会
TEL 0575-28-3111
振替名古屋637909

高山市の博物館・美術館

岐阜県博物館協会副会長
高山市長 土野 守



<観光の歴史>

高山市は、現在人口6万6千人余、年間230万人が観光に訪れますが、去年は地域伝統芸能フェスティバル、安房トンネル開通効果もありまして293万人

の観光客が訪れました。

飛騨高山の知名度は全国的に高く、国民の多くの方が知る有数の観光地に成長させていただきましたが、これには先人諸氏、関係諸機関の長年にわたる努力によるものと思います。

高山の観光の歴史は古く、明治後半には北アルプス登山を中心に温泉地観光開発が進み、大正時代には観光産業として力を注ぎ始めました。当時の遊覧地は城山公園、東山寺院、国分寺、高山祭ぐらいて、観光客も10万人台でした。

後、高山線の開通(昭和9年)、第二次世界大戦終結を経て新しく観光地の開発が始まり、乗鞍登山バスの運行も始まりました。しかし、泊まり客は平湯や下呂ばかりで高山に泊まる人は少ない状況が長く続きました。それを打破したのは昭和40年の高山国体、国鉄のディスカバージャパンキャンペーン前後からで、全国トップクラスの観光地へ躍進することになりました。

<ミニ博物館・美術館建設へ>

観光産業の発展と共に、ミニ資料館も増えてきました。現在、公営、私営合わせて25の施設がありますが、それらは、温存されてきた高山の民俗と歴史的美術・工芸を基にしたものばかりです。無理をせず、熟成期間を経てじっくりと収集、建物移築、施設整備がされたものばかりです。

高山独特かもしれませんが、目的達成に至るまでの前段階が少し長く、「より良いものを長く…」という考えのもとに博物館・美術館づくりが行われてきたと感じております。そのため、これからも将来にわたって維持してもらえるものと考えております。

<町並みを含めたまるごと博物館>

高山市街地の各館は規模が小さく、その館だけでは見所が少ないのです。古い町並みやその周辺の伝統的町家を多く残した町並みを歩く中に、特色ある展示をした館が随所にあって、そこを巡る楽しさが魅力となっています。町並み景観を守っている区域、これから守っていくこうとする区域の人たちは、有形、無形の歴史的束縛を心地良く、また、誇りに感じています。その心意気が漂う中にミニ博物館があるのです。

<心のこもった館に>

郊外には民家集落の「飛騨の里」がありますが、最近ガラスの美術館を中心とする飛騨高山美術館、地中大空間に平成の屋台等を展示する祭ミュージアムなど大規模施設ができ、芸術文化、工芸技術の発展に寄与される館として期待をしています。

また、本年中に民間の大規模な美術館が、また、平成13年頃には県立世界民俗文化センターができようとしています。施設の新築、増改築がどんどん進んで、大変見所が増加してきつつありますが、その背景にある市民層の支持母体が重要、かつ大きなポイントになってこようかと思えます。展示物が単なる歴史の遺物としてとらえられるのではなく、心がこもった感動を覚えてもらえる施設になるよう願うものであります。

「多様な文化的要求に応える博物館を目指して」

日時：平成10年11月5日(木)～6日(金)

会場：水戸市 茨城県立県民文化センター

本年度の全国博物館大会が237の博物館関連施設から322名が参加して開催された。



開会式では、永年勤続者39名・寄付者4名が表彰され、2名に棚橋賞が授与された。

全体会議では文部省及び文化庁から11年度予算要求の概要等の行政報告があった。その内容は完全学校5日制に向けて夢を持ったたくましい子供を育てるための「博物館・美術館を楽しむ」ハンズオン（自ら見て・触れて・試して・考える）活動の推進や職員の資質向上を図る事業など多岐に亘るものであった。

午後からは、「多様な文化的要求に応える博物館を目指して」をメインテーマにシンポジウムが開かれた。

茨城県立歴史館からは、学校で「土器づくり」を行いその作品を町の文化祭で展示したところ好評を得たことから、県内の教員や社会教育指導者を対象に研修を行い県内に体験学習が広まった状況などの事例が紹介された。

国立科学博物館からは、「博物館は自ら積極的に資料と知識を生かし、展示説明、講座の開催など色々なやり方で教育機能を活性化させる必要がある」、「学芸員はややもすると教育者には指導する一方、子供の指導は敬遠しがちになるが、子供の自由な発想に刺激されるなどして素人によく分かる説明ができる良い教育者になってはじめて良い研究者であるといえる。」などの話があり、さらに、ボランティア活動については、学芸員が独善的にならないよう自戒し、ボランティアならではの活動の工夫をする必要があることなどが

話され、その活動事例が紹介された。

徳川美術館からは、ボランティアの導入経緯や多岐にわたる活動内容が紹介され、入館者から好評を得ながら運営の幅を広げることができたとの発表があった。

大阪市立自然史博物館からは、友の会の成り立ちや活動内容が紹介され、「ボランティアは常に学芸員と一緒に仕事をするを前提に活動し、『何々がしてみたい』となるように館が条件整備をしている。友の会活動がまさしくボランティア活動である。」との話があった。また、「市民の顔が分からなくなったら博物館は終わり」との考えから学芸員が展示室に常駐しているなど日頃の活動状況の一端が紹介された。

翌日には、「学芸員のあり方」と「ボランティアを巡って」の二つの分科会が開かれた。博物館と学校教育との連携の在り方、それに関わっての学芸員の役割及びボランティア活動を推進する上での学芸員の役割が討議され、「調査研究の世界だけにこもってはいけない。普及活動への積極的取り組みが必要。そうすることで博物館としての調査研究も深まる。」など活発に発言がなされた。ボランティアについては、「活動には定まった方式・内容は無く、それぞれの館の実状に合った内容で受け入れ、いろいろな分野の人が集まって成り立ち、幅広い館の活動ができる。そのため、館側の体制を整え、考え方をまとめ、職員の意識を統一し、館はボランティアに何を与えることができるか、社会的にどう評価するかを考え、感謝を忘れない。」等の意見が出され、ボランティア活動を考える良い場となった。

最後に、大会決議がなされ、陳情・要望活動を協会事務局に一任して閉会した。

(決議文要旨)

・博物館関連法制改正の推進、
・学芸員等の資質向上のための諸施策の実施、
・税制措置による支援推進、
・博物館活動に対する助成の充実

(岐阜県博物館 伊藤金夫)

第79回岐阜県博物館協会公開講座報告

「博物館におけるマルチメディア」

期日：平成11年2月13日（土）14:00～15:30

場所：岐阜市科学館

講師：名古屋市科学館学芸員 佐伯平二氏



第79回公開講座が「博物館におけるマルチメディア」という演題で岐阜市科学館において開催されました。講師は名古屋市科学館の学芸員 佐伯平二さんです。当日は博物館関係者、マルチメディアに関心を持つ学生など32名の参加者がありました。佐伯さんは名古屋市科学館におけるマルチメディアの取り組みを中心に講演され、その教育効果について考察されました。以下に講演の要旨を紹介します。

1) マルチメディア導入の経緯

はじめに、名古屋市科学館における特別展示と常設展示の現状と問題点について話がありました。科学館がマルチメディア導入を決定した理由は常設展示の活性化のためとのこと。経済が思わしくない中、博物館施設が陳腐化した常設展示を更新することはなかなか困難です。そこで、名古屋市科学館は国のさまざまなマルチメディアに関するモデル事業に積極的に参加しながら、科学館の展示の活性化に役立てることになったようです。

2) 科学館インターネットの利用

科学館インターネットは名古屋市が昨年整備したものです。このシステムは①展示室でのホームページへのアクセス ②海外の科学館との通信実験 ③プラネタリウムでのイン

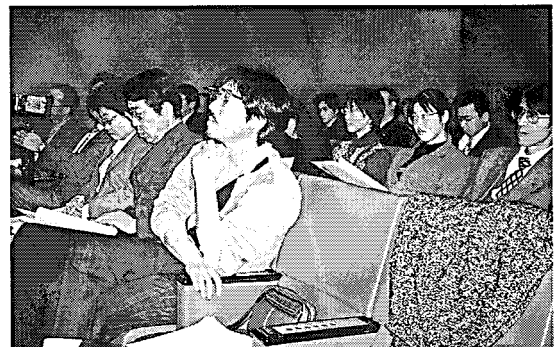
ターネット情報の利用 ④職員の通常業務に利用されています。

3) 文部省委嘱インターネット事業

この事業は文部省において科学系博物館活用ネットワーク事業として名古屋市科学館に委嘱されたものです。科学館では八つの中学校および高等学校とネットワークを結び、科学実験に関する情報提供や生徒からの質問メールの受付を行いました。事業は今年度で終了するとのことですが、質問メールは予想外に少なかったそうです。

4) 科学技術庁委嘱マルチメディア事業

この事業は科学技術庁が平成10年度補正予算で「科学館整備モデル事業」を名古屋市科学館を含むいくつかの拠点科学館において実施するものです。事業の主な目的は青少年がマルチメディアを通じて科学技術に対する理解を深める環境をモデル的に整備することで、名古屋市科学館では、全国の科学館と情報ソフトの共有、サイエンスチャンネルの放映などを考えています。



最後に、佐伯さんは科学館にとって機器やランニングコストにお金がかかるマルチメディアが果たして教育効果があるものかどうか、まだ結論を出さずに利用の可能性を探りたいとし、講演を終えられました。

(機関紙委員 岐阜県博物館 説田健一)

中津川市鉱物博物館

〒508-0101

岐阜県中津川市苗木639番地の15

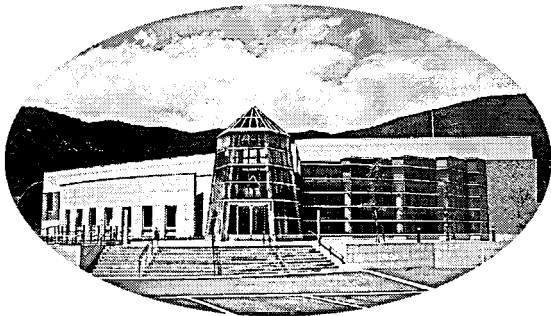
TEL 0573-67-2110 FAX 0573-67-2191

URL http://www.takenet.or.jp/~m_museum/

中津川市鉱物博物館は、平成10年5月1日に開館した自然誌系博物館です。

この博物館は、中津川市出身の鉱物研究家故長島乙吉氏とご子息の地球化学者故長島弘三博士から中津川市に寄贈していただいた貴重な鉱物コレクションの展示と、日本三大ベグマタイト産地のひとつである「苗木地方」の紹介、さらには中津川市の地質を楽しく学ぶ場と位置づけました。また、周囲は自然とのふれあいの場として、「夜明けの森きらめきパーク」としたフィールドミュージアムです。

当市では、この博物館を自然科学の学習拠点施設として位置づけ、生涯学習、学校利用に役立てていく計画です。



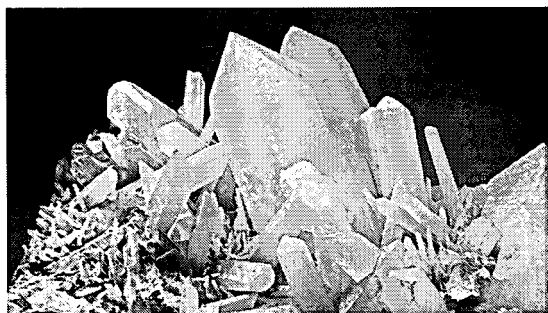
博物館の構成は次のとおりです。

【本館】

常設展示室は、導入部の「水晶のトンネル」と7テーマにより構成されています。

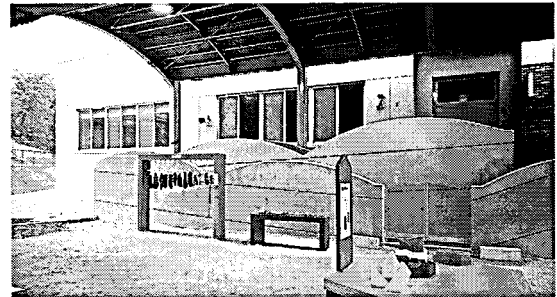
苗木地方の鉱物・岩石の紹介、市内周辺の地質の紹介、鉱物の性質、長島鉱物コレクション、鉱物と暮らしとの関わりなど、多面的に鉱物の世界や地質を紹介しています。

企画展示室は、自主事業のほかに、一般参



加による自然に関する発表の場『私の展示室』として活用していきます。

情報サービスとして、レファレンスコーナーを設け、図書・地形図、鉱物・岩石・化石標本の閲覧のほか、パソコンによる博物館情報の検索、岐阜県生涯学習情報の閲覧、「気象衛星ひまわり」の画像情報を見ることができます。また、全国の自然史系博物館のうち主な施設の情報コーナーも用意して、来観者の便宜を図っています。このほか研修室、実習室を設け、講演会、講座、教室などの事業をすすめていきます。



【別棟】

上屋構造のみの場所で、鉱物と親しむプレーゾーンです。ここでは、石の楽器、結晶の積み木のほか、ストーンハンティングを楽しむコーナーも用意してあります。

【フィールド】

フィールドは、博物館の自然観察などに利用するほか、散策路を利用したネイチャーオリエンテーリング、フィールドアスレチックのほか、大型遊具も設置し、親子で楽しめるレクリエーションゾーンです。

このように、当博物館は「学び、体験し、遊ぶ」を各ステージに用意し複合的に利用できる施設です。皆さんも、鉱物の世界をのぞいてみませんか。

【交通等の案内】

交通 JR中央線 中津川駅から北恵那交通

バス「夜明けの森」下車 徒歩25分

中央自動車道 中津川ICから国道257号線

経由 15分

開館時間 午前9時30分～午後5時

(入館は午後4時30分まで)

休館日 月曜日

12月27日～1月5日

共通入館券 青邨記念館、苗木遠山史料館、

子ども科学館との共通券です。

(中津川市鉱物博物館 荻野義雄)

2100

古紙配合率100%再生紙を使用しています。